

以下の記載は、表題の診療ガイドラインから漢方製剤に関する記述を抽出したものです。診療において漢方製剤を使用される場合には、必ず、ガイドライン全体をお読みになり、その位置づけを正しく理解された上で行ってください。

ガイドラインのバージョンは最新のもののみを掲載しています。改定がなされていないガイドラインは、そのまま掲載しています。このガイドラインと其中的漢方の記載を、診療の参考にすべきかどうかの判断は、使用者の責任で行ってください。

がんの補完代替療法クリニカル・エビデンス 2016 年版

日本緩和医療学会 緩和医療ガイドライン委員会（委員長：太田恵一郎 日本医科大学消化器外科）

金原出版、2016 年 6 月 20 日 第 1 版第 1 刷発行

Minds 掲載 無

■1 漢方薬

疾患：

（漢方薬の特徴）

有効性に関する記載ないしその記載：

治療のトピックスの漢方薬の項に、下記の記載がある。

『漢方薬とは？：1874（明治 7）年、日本政府は国として医療制度を普及させるために医制を布告し、医師、歯科医師などを資格制とした。その後、日本の医療は西洋の医学を取り入れ、世界的に発展し現在に到っている。そのなかにあって、紆余曲折こそあったが、日本の伝統医学である漢方医学は、現在すべての大学の医学部で授業カリキュラムが組まれ、漢方教育が行われている。漢方医学の治療で用いられる漢方薬は、植物、動物、鉱物などの生薬を組み合わせた合剤である。漢方薬には、医師が処方する医療用漢方製剤と、薬局で購入できる一般用漢方製剤がある。

日本の漢方薬の特徴の一つは、医療用漢方製剤に保険適用が認められているということである。医療用漢方製剤はすべて、厚生労働省によって承認された原材料をもとに作られている。さらに、製品の安全性や品質管理は製造・販売会社によって厳しく保証されている。一方で、一般用漢方製剤は保険適用とはなっていない。しかし一般用漢方製剤も厚生労働省によって承認された原材料を用い、製品の安全性や品質管理は製造・販売会社によって厳しく保証されたものであることには変わりはない。

■2 漢方薬

疾患:

がん

■3 大建中湯、牛車腎気丸、六君子湯、半夏瀉心湯、芍薬甘草湯、十全大補湯、補中益気湯

疾患:

がん

引用など:

日本東洋医学会 漢方治療エビデンスレポート 2013 -402 の RCT (EKAT 2013)

<http://www.jsom.or.jp/medical/ebm/er/index.html>

【現在は最新の EKAT2019 にリンクされている】

<以上 2~3 の記載として>

有効性に関する記載ないしその要約:

治療のトピックの漢方薬の項に、下記の記載がある。

『漢方薬を用いた臨床試験: 医師は、例えばがん診療においては、抗がん剤の副作用軽減を目的として、さらに患者の生活の質 (QOL) の向上を目的として、漢方薬を使用している。現在の傾向として、漢方薬は、言い伝えや経験による使用方法に加え、基礎研究やエビデンスに則った、漢方薬の作用機序を理解したうえでの処方および使用が増えてきている。がん患者が、安全に安心して漢方薬を使用できるように、毎年、多くのエビデンスに基づいた漢方薬の研究結果が発表されている。特に漢方薬は、西洋医学では治療方法のない場合の補完ということで、西洋薬では効果が得られない部分を補っていることが多い。実際、表のように多くのがん治療の現場で漢方薬が用いられている。』

備考:

がん治療時に用いられる漢方薬の表中に、大建中湯 (腸閉塞、術後腸管運動麻痺)、牛車腎気丸 (リンパ浮腫)、六君子湯 (胃がん術後の逆流性食道炎)、半夏瀉心湯 (抗がん剤 (イリノテカン塩酸塩) による下痢)、芍薬甘草湯 (抗がん剤 (パクリタキセル) による筋肉痛・関節痛)、十全大補湯 (進行乳がんの化学療法+ホルモン療法における併用による生存率改善)、補中益気湯 (胃がんと大腸がんの手術侵襲の軽減) の記載がある。

■4 漢方薬

疾患:

がん

引用など:

北島政樹 監, 今津嘉宏 編. がん漢方, 南山堂 2012

有効性に関する記載ないしその要約:

治療のトピックスの漢方薬の項に、下記の記載がある。

『漢方薬の注意点: 漢方薬は近年エビデンスも認められ、西洋薬では対応できない症状の改善に用いられてきている。作用機序や副作用を考えたうえでの漢方薬の使用は、これからも重要なポイントとなると考えられる。』

副作用に関する記載ないしその要約:

治療のトピックスの漢方薬の項に、下記の記載がある。

『漢方薬の注意点: 漢方薬は自然のものでできているので副作用はないという誤解が多く見受けられる。漢方薬も薬効を有する生薬でできているため当然副作用もあり、さらに、他の薬との相互作用も認められる。』

備考:

代表的な生薬および漢方薬の副作用等の表中に、大黄、芒硝（腹痛、下痢など）、麻黄（動悸、血圧上昇など）、甘草（浮腫、血圧上昇など）、附子（動悸、血圧上昇など）の副作用について、また、石膏、牡蠣、竜骨、大黄、牡丹皮、芍薬、桂皮の相互作用、甘草、小柴胡湯の併用禁忌の記載がある。